

牛久：学校周辺に見る自然

第23号 牛久二小

2013年11月9日発行

＜ 秋の生きもの観察 ①チョウ ＞

11/6、前回の観察(20, 22号)からちょうど2ヶ月たち、牛久二小4年生と秋の校庭の生きもの観察をしました。気温は17℃、もう冬が目の前です。生きものたちの冬越し準備に注目して観察しましたが、今回はチョウのなかまの紹介です。



はねを休めるヤマトシジミのオス。幼虫で冬を越す。幼虫のえさはカタバミの葉。

まずは、おなじみのヤマトシジミ。このチョウは幼虫で冬を越すので、10月まではあちこちで交尾や産卵のようすが見られましたが、11月に入ると産卵も終わったのか、はねもいたんできて元気なく飛んでいるように見えます。幼虫はカタバミの葉を食べるので、探すと見つかるかもしれません。



左はウラナミシジミ。はねの表はうす紫で、うらはその名の通り茶色と白の波もようが特ちょうですが、もうはねのもようもハッキリしなくなって、ボロボロな感じですね。もともと南の方のチョウで、夏から秋に北へと分布を広げますが、牛久あたりでは寒い冬を越せず死に絶えてしまうそうです。

コセンダングサの花みつを吸う、ウラナミシジミ。夏から秋に南の地方から北へと分布を広げるが、牛久市周辺では寒い冬を越せず死に絶える。



こちらはモンシロチョウ。昨年、3年生の時に育てたでしょうか？さなぎで冬を越しますが、もう交尾や産卵を終えたのか、やはり力なく飛んでいました。チョウのなかまでは幼虫で冬を越すものが一番多く、続いてさなぎ、卵で、成虫で冬を越すものは1割ちょっとだそうです。成虫や幼虫の場合、冬でも暖かい日には活動するものもいるようですが、大部分は「休眠(きゅうみん)」といって、半分死んだような状態で冬を越します。

グラウンドの低いところを力なく飛ぶモンシロチョウ。牛久市周辺では、さなぎで冬を越す。



葉の上ではねを広げ、体をあたためるキタテハ(秋型のメス)。さかんにカキの汁を吸って冬越しに備える(右)。

他の仲間にくらべ、成虫で冬を越すものが多いのがタテハチョウの仲間です。このキタテハもそう。はねのふちがギザギザで、この特ちょうあるもよう、一度見たらなかなか忘れません。はねを閉じたとき見えるうら側のもようも特ちょうがありますね。成虫は花のみつも吸いますが、この写真のカキのように、熟しすぎた果実の汁や樹液をよく吸います。冬が近いので食いだめするのでしょうか、近くで観察していてもすぐには逃げませんでした。幼虫は、カナムグラの葉を食べます。



ちょっと似ていますが、こちらはアカタテハ。同じく成虫で冬を越します。カキの汁を吸いにきたのか、近くのシャリンバイの枝にとまっていた。秋に、いろいろな花でみつを吸う姿が見られます。なお、これによく似たチョウでヒメアカタテハというのもよく見かけますが、そちらはウラナミシジミと同様秋に北へと分布を広げ、やはり寒い冬を越せず死に絶えます。

成虫で冬を越すアカタテハ。カキの汁を吸いにきたのか、近くを飛び回ったり、枝にとまったりしていた。



カキの汁を吸うルリタテハ。成虫で冬を越す。雑木林に多く、はねのうらのもようや色は樹皮そっくり。

最後に、はねの表に青いすじが入った美しいチョウ、ルリタテハ。やはり成虫で冬を越します。すばやく飛ぶのでなかなかアップの写真をとれないのですが、よほどお腹がすいていたのか、それとも冬に備えて食いだめしていたのか、みんなでワイワイ観察していても逃げずに吸い続けていましたね。雑木林でよく見られますが、はねのうらは色ももようも樹皮にそっくりなので、はねを閉じて木の幹の割れ目などにいたりすると、まず見つけれません。

【理科支援員：宮内】